季書
註解改正月令博物筌 上 月部 二

二月部目録

○養生の法○雨風の考○栄の幣
凶○妙薬その外人家重宝のこと
例やよ物多あるゆへ
見録ハしるさず

△印あるハ俳諧の
季と持ものゝ

二月

月建 月支の名 調子
陰陽生 異名 初丁

△驚蟄節 ○古候 二十二候 二丁

△春分中 ○七十二候 ○天氣古候 二丁

二月日令 二月日の定りなくして
さだまることと爰ハあるべし

△中和節 日酒 四丁

△献生子 四丁

上春服 四丁

△吉野餅配 四丁

△南都二月堂行 四丁

△釈奠 五丁

△初午 稲荷祭 六丁

△水間祭 六丁

△東福寺戒法 七丁

△广耶参 七丁

初午諸祭 七丁

△南都春日祭 七丁

△近江本妙寺詣 七丁

△大原の祭 八丁

△八幡初卯 八丁
踏青節 八丁
賜尺 八丁
萬神都會 八丁
△行基忌 十丁
祈年祭 十丁
△若宮能 十丁
紙園八講 十丁
泉涌寺創開帳 十丁
△列見 十丁
△三月堂水取 十丁
△涅盤會 十丁
△佛の別 十丁
△嵯峨柱炬 十丁
△興福寺常楽會 十丁
△彦山祭 十丁
△園韓神祭 八丁
迎富 八丁
蚕農市 十丁
△出代 十丁
△二月分 十丁
△蕪能 十丁
△遺教経會 十丁
△貝殼五穀祭 十丁
百花朝 十丁
花朝節 十丁
△二月の別 十丁
△さゝ佛 十丁
△天王寺常楽會 十丁
△積塔 十丁
△貝寄 十丁
△浅間祭 十丁
△天王寺聖霊會 十丁
△天神御忌日 十丁
△餅花奠 十丁
天和の節 十丁
△道明寺祭 十丁
△菜種御供 十丁
△比良八講 十丁
観音誕辰 十丁
並賢菩薩 十丁

二月令

此部おい日の定まりなる二月一ケ月のあらまほしきかな

△彼岸 十丁
彼岸迎僧狀 十丁
天王寺踊念佛 十丁
△治葷酒 十丁
△社日 十丁
△紙鳶 十丁
△初雷 十丁
侯霜 十丁
△田畑野山燒 十丁
季御讀経 十丁
彼岸天王寺祭 十丁
△時宗踊念佛 十丁
男女嫁娶 十丁
得子 十丁
鶺鴒の圖 十丁
△氷口祭 十丁

二月草木 此部ふい二月一ケ月ふさなの類とあり例えーこ子

△苗代 同菜萸 廿三丁
△種浸 △種井 廿三丁
湯種 △種ち 廿三丁
△種蒔 △種ゑ色 廿四丁
△藍麻とまく 廿四丁
△蕨 廿四丁
△蒲公 廿五丁
△杉菜 廿五丁
△狗脊 廿五丁
△枸杞 廿五丁
△五加木 廿六丁
△虎杖 廿六丁
△韮 廿六丁
△蒜 △野蒜 廿六丁
△水葱摘 廿八丁
△蕗花 廿八丁
△菜の花 廿八丁
△大根の花 廿八丁
△鬘草 廿八丁
△末黒薄 廿八丁
△草芍 廿九丁
△草九若葉 廿九丁
△荻の焼原 廿九丁
△芦角 △芦錐 廿九丁
△角組芦 △芦の芽 廿九丁
△艾摘 卅丁
△君紫 卅丁
△接骨木花 卅丁
△銀杏花 卅一丁
△紅梅 卅一丁
告紅梅盛文 卅一丁
△八重梅 卅三丁
△座論梅 卅四丁
△越中梅 卅四丁
△黄梅 卅四丁
△初桜 △初花 卅四丁
△待花 卅四丁
△糸櫻 卅四丁
△姥桜 卅五丁
△見桜 卅五丁
△一重桜 卅五丁
△彼岸桜 卅五丁
△熊谷桜 卅五丁

種植 草木のたねまきうゑつぎ接木こうぐのこと 此丁ふ

△接穂 卅五丁
茅子栽秧 卅六丁
西瓜まく 卅六丁
さゝ木 卅六丁
よやゝとる 卅六丁
蓮を植 卅六丁
修樹 卅七丁
藥種根を取 卅七丁

二月生類 此部ふい二月一ケ月の生こんと集めたること

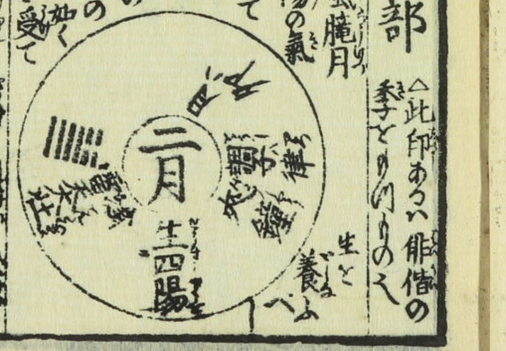
△果烏 卅七丁
△雉子 卅七丁

△燕　同巢　ニテ　六十
△引鶴　△引鳴　ニテ　四十二
△孕雀　△雀の子　ニテ　四十四
△孕鹿　ニテ　四十五
△蜂　△蜂の巣　ニテ　四十六
△蝶　ニテ　四十七
△蟾蜍　ニテ　四十九
△蛙子　ニテ　四十九
△蒸鮚　ニテ　五十
△蛯　ニテ　五十一
△むろこ　ニテ　五十二
△歸雁　ニテ　四十二
△鳥巣　△吉巣　ニテ　四十四
△松毛鳥　ニテ　四十五
△鹿角落　ニテ　四十五
△立虫　ニテ　四十七
△蛙　ニテ　四十九
△青蛙　ニテ
△鮡子乗　ニテ　五十一
△田螺　ニテ　五十
△寄居虫　ニテ　五十
△馬刀　ニテ　五十

二月必用　此部かい風雨の占○破軍の他行の心得○作事のようあり　料理ちん立の法　食物のようあり　醫薬品々ありかた日の定まる事ハ口の日　今の部ハあり此部ハ日のさだまり　ごろ　二月一ヶ月要用の事とあつ先〜〜

二月之部

△此印あるハ俳諧の季とりのもの



當月い清風臘月　生と養ふべ
舒はして仲陽の氣
整野外へ出て
青艸と踏天
氣と專小受
べし則扶陽の
術そ草木の
日咎とうるる如く
人も日の影を受て

異名

△仲春　△陽帝　△賀月　△令月
△夾鐘　△驚蟄　△春分

△小草生月　△梅見月　△雪消月
△梅津月　△衣更着

異名註

○夾鐘ハ　夾ハ夾也而の物あり
夾ハ夾也而の物あり
○如月ハ雨
雅曰二月ハ如雨いつて驚蟄。
春分のこけハ二丁目あり

(哥)　蔵玉　小草生月　顕昭

みどりもとるげつきたちにふきぬ
月待なるひさ〜〜のくさ

(哥) 梅花さき月　友則

うぐひすとのかよハぬ里の宿ハ梅つさ月ゆ
え　なこそ　ゆ　梅つさ月ゆ

(哥) 蔵王　梅見月　有家

とふ人もなき花ゆゑの梅見月
風のなさけを待くまるゝ春

(哥) 莫作　雪消月

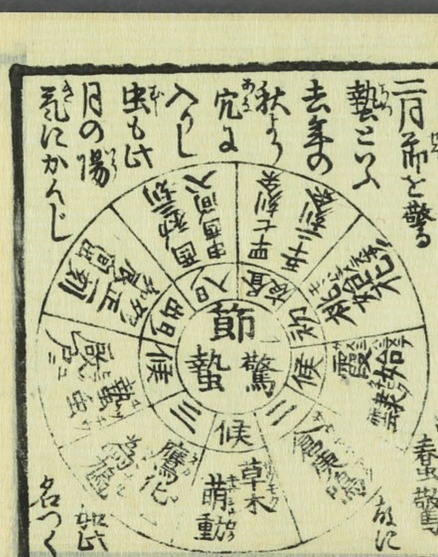
○とけて春もえすゑ富士の根の
○ときさえ月のけもふれ、はい
俳花のさく本いさ(ら)ゆ孝

節。驚蟄。七十二候。草木萌動。

候。昼夜長短目の出入等左記

二月節を驚蟄

去年の秋ゆ
穴ゆ
入りし
虫も出
月の陽
気にかんじ



○梅始花ハ梅の花ひらきはじめる
○倉庚ハ鶯の別名なり　俗にうぐひ
とのゝ異名ともそれども張会庚ハ
鶯鮮ツクヒス又カラウグヒスともひて来
大坂の辺に来るくゝとは　大きさ石
舌のでくるいうぐひすに似ゝり尾
と羽とも黒毛あり　多ウグヒス
小似ゝり二月ゆ鳴ゝ初ゝ　○鷹ハ
陰類なり鳩ハ陽類　仲春に鳥
さくんなるゝ感じて陰類の鳥
も陽類の鳩と変ゝるなり　礼記出
仲春に鳩化ゝるといつゝなり　氾出

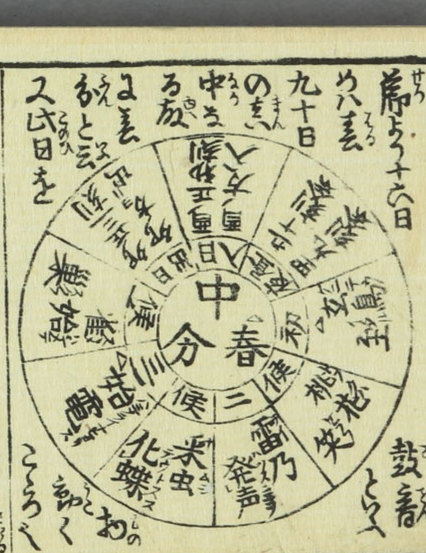
妙術　節の日石厄と門徒ゝ分べ
の下に拵付ゝ出ゝ出ゝ

節占候　雷あれ
あ大ゝ中旬に雷あ
ゝ丙午年傷人下旬雷あれ
蟲あり　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ年ゝ辰巳ゝなれハゝ
ひ〜あり　龍の方早ゝり

中

△春分。七十二候。草木萌動。日の光倉長長短長しくたにまろす

篇ろ十六日
ゆハ玄
九十日
の玄
中ち
る灰
ゆ玄
ゆと云
又式日を



鼓舞
とらく

玄鳥ハはとめこまの社日に来
秋の社に帰るこ布中に来りて
人家に巣をむとびるをすむ
○雷声を聞くことハ教令伝云陽
陽相薄る感ドて雷となるこ
琴ひりを雷といひ琴ひりを
電と云玄ハ陽にべるのそ〜ら
灰琴あり秋ハ陰に入るれてゆ
ゆるとべ琴ちゆく電こ皆陰陽
の様ゑそれハ地ふ上ありて上天ゑ

発とるあ〜○玄鳥ハ日本の玄
さるひとしくはく北ハく寒暖こと
又ひとし鈴を左ハ秋あけて日の出
るまうて二分ゆまを晴と日入を暮く
きて二分ゆまを陽と日入を暮く
ゆせてゆ時ハ秋ゆ属をといくり

春分祭 此日考妣先祖を祭るべし
考妣ハ先祖父母ようこと上式
い入父母先祖ハ祖父母の長ゆ
云るべらば祭日ゆ一年ハ
入日ゆ四時ゆ云日ゆ春
秋夏至秋分冬ゆ至ゆ云
秋二時ゆ分りてゆ云日
一年に一日ふて和俗これ祭
月ゆ入毎月云日ゆ和にあら
ず春秋の祭りゆ平安ゆ
てゆのごゆく平安ゆ

春分 天気占候 老人家ゆ日の夕の下に沒れ

天下大平國富たり○都
邑懷の方の生中に生ずべし順産
なり青色右くしれでは毎年か
死し左に生ずべし陵墓いづるもし
氣生ざれば雪とくくん氏世ちくん
く雪こ雪のりあしくんぶ年中雪
函○○雪函ふれば年〻○
雲は早く○日晴ればすべて熱熱して
絲物ふらしまたひうるる
けもの年とあるべし

春分占風

西 変 凶

東 物 吉

東北 寒 温

北 豊 凶

西北 水旱

北東 ひでり

南東 ふく

南西 ふく

日月風のふく
かを
うんて
豊凶
寒温
水旱
をあらかじめ
定まらざるべ
しべる

日令 二月日の定りたることなり
定りたることは紀よりろ

朝日 中和節 唐代世初春なり中
中和酒 此日唐世百官及庶民
をすすめる三月曲水の宴に

詩 花隨春令發 鴻度歳陽過

獻生子 唐土民間のもの青
袋に百穀凡果の種
を盛りて相共に人におくりて
らくことこれを献生子といへり

ふしぎいうるの本をうれば佳
の徳をうるべし

上春服 唐土は王公貴臣より
里うり衣服たこころ

天氣占候 明日風雨なれ
ひ稲あしくなり

たひ貴しー又病あるひ
行りて人をるべ
く煩ひ

妙術 朝日いうと日出でる
くれ遠志の心と云り
てせんぶ二林のこと
だせば疫をうるゝ
無病ゆゝこ長壽を
實に是神仙の奇々妙法
吉野餅配 朝日花供
法の両行人
本堂へ出て御供奉
廣庭ふる餅を
南都 西京薬師寺造花會
朝日七日より金堂中
にいろ〳〵の造り花と供ト大法會
行る俗に西京の花とゝ云
二月堂行 南都くゝ水取十二月メニ
朝日より十四日まで
牛王加持の修法あり上七日八大像
觀音下七日八小觀音を勤る僧侶
多の僧とゝ
俳 あるや多の侍の出れる 芭蕉

大坂 天王寺六時堂修上會
有朝日より三日迄酉ノ刻
上丁日 **釋奠** 孔子と
二月八月両度有
諡を大先至聖文宣王と申奉る
いろ〳〵朝廷より年毎に大學寮
うて孔子をまつりうやと
ては孔子と弟子とゝ
府うては孔子と閔子騫
延喜式より文
武天皇大宝元年二月
きりとなり後花園院寛正年
中にて絶まるゝ應仁の大乱
絶より孔子は上一人より下萬民
至るまで天下萬世の師とれば本
朝もまつり給ひしゆへ
以次第に詳なり○禮記王制
釈菜奠幣とある釈奠と和
訓よむきまりを
とゝいへり

二位中将

哥 年中行事

かゝゝのかゝゝこそけとうしをあて
ひゝとせのうしとくまうるなりう

俳 伝授の補いを除き歌莫　嵐雪

歌莫鳥の反嘯さんなう　野坡

詩 上丁詞　唐　陸放翁

燎火明中庭老槐泣殘雨

○孔子ヲ、礼神前ニ庭火ヲタキ、ヲ者ヲタリニ乃ホトリ木カ、ルヤウニキコエル

白頭奉祀事恐羅劇仰俯

○ワレラカゴトキ白頭ノモノムツリニアツカリテモヲキフシ、テオカムモクルシキ

三終樂在懸再拜肉外俎

○三番ノガクドウダカカケテアリ、ヲラヲヽヘテオカムナリ

誰言千載後恍若到鄰魚酒

○カク年ヲヘテ聖人ノ生コクニイタルヤウニオモフトハタレモオモハヌンダ

吾國雖編小大社祚茅土

○コノクニハイヤカノホサキクニナレドモ大キナル草ニテツミテツクルコトジヤ

如何儼章綬日夜苦蕪楚

○カヒミカク官人ノ印ヲオビテキビシカコルニルバワトメニソルシキソ

藏書如丘山及物無一羽

○五ハ書ヲ山ノコトクオサメアノ三井ニ何ヒトツ入ノクメニホドコサメイニゾヤナレバ

吾其可憐哉去々老農圃

○アハレムベキモノジヤ吾ハコノツトメハヤメテ百姓ニテ身ヲハタサン

初午

稲荷祭　諸國これを祭るゆゑ

山城伏見のいなりといへるハ元明天皇和銅四年二月十一日

此山ヲ祝し奉る古曆を以て考ふるに此日午こと見る五穀の神なれバ福神とも唱ふ山を三の峯と云本社ハ一八字宮

虚空二素盞烏尊第三大市姫又田中社四大神併て五座と云永享十年三の峯より今の地へうつせり此日ハ洛中洛外ゝ群衆す市人は黍粟等の種をうるしあるひ

い土人形さうろは漂草の名
ねされば なう古い杉と杉ってか
さーー殿りしう 遠さともいろうこう

(哥) 夫木 知家

いまう山杉のあと葉さびしく
かへるいまろきろくのもろ人

後拾遺 恵慶

いまう山三のむかきうちたてき
我ねぎこと我神もこうこよ

いまう山三の杉とたづのあて 顕仲

あまうくくのかざすりくるる

延喜年月次屏風初年条の画貫之

ひくうのこ我こそなくにいろる山
こうれ鶴のこかくくをらん

(排) 山ふ旨杉のまれいこふ支考
引に初年五の小篠系仝

(狂) 初年いくまひ新てうぶう
祝ぎ花ら兵衛どのうる貞梅

水間祭

和泉國水間観音行基の他聖武天皇の勅願此日くくに草蘚を立て境内に入る者を除く○草蘚を除く年ごとに悪難を除く

(排) きつもやや水ろ酒で
の鼠の生え 沒生

京東福寺懺法

京 東福寺内にある条 恵日山と号す 懺法六時法

の罪と懺悔する修行 此日名画
兆殿司の画の観音の像世三幅を
かくる心又十万の札として火除の
守と方すの紙又十万の字とか
いて寺内同聚菴ちういだす

(排) 叙ろの像も懺悔よ東福寺 越人

摩耶参

摩耶参 摂州兎原郡畑原村山上よあて佛母摩耶山忉利天上寺と云天武天皇の御時法道仙人の創造なり十日参詣の人は福となる又馬の無難を祈る土産もの昆布と賣是と摩耶昆布と云山の絶頂へ絶景〻摂播又四国の

山海一目にのぞみてをもしろし　耶条　都丈

(俳)横股のをゝ及もをしろし

(狂)糸ぢハ山の下からのぶるくされ　湖春
はよまやの紀ゑとゝ

近江本妙寺詣

今ハ寺院跡たり旧跡ハ

三上山のほとりよあり今も初つ年よハ海す帝分れ上れ条

上申 **南都春日祭** 仁明天皇嘉詳三年

九月始て中臣秀基奏聞ニ
て清和天皇貞観十一年十一
月九日庚申の夜初て行る其
式ハ次第ハ関白藤原家の定

(哥)堀川き三百首　顕仲

まこと花ふいのらまて春日山
松のさゝえもいやまさらぬく

日

あめの下たえどそ思ひさもべ沈　仲実
かすゞの山れ神とまつもとゝ

(詞)小車。家人。寄。初冬。南家。三条。

上卯 **大原野祭** 山城乙訓郡 京より西里

許西し春日の社と同神ろ
仁寿元年二月后宮御祈の為
に勅へ勧請なし奉たるなり
大原野行幸ゑどもあり

(哥)年中行支　経賢僧都

きちゝ花やゝ神まつるをしぬ
こやゝ月ゝくよゝ花のもゝ

伊勢物語

大原やとしのふもゝくとハ
神代のゝもれりひいづゝあ

(詞)糸毛車。むろつ。能。ほすれ

(俳)大原女本も女にゝれ　宗因

京 八幡初卯。神系あり。伶人
山井。多豊安倍とゝれと勅。

上丑 **園韓神祭** 古大内裏の宮内省有後

楽屋にゝ昔八二月十二月に初る
糸議一人をゝ不に勅て事ゝ

(俳)人はことぶされ其神の名なり　本説に云
なれば酒醴井通にあり　都丈

二日 不成就日

踏青節

三月

二月民俗酒をたづさへて郊に出て花賞とるを踏青と云閏中二日ともつて出ることする

占候

二日 雨　あれば蟹菜大のはし為氷に早なり

迎富

もろこしの法酒を携へ郊外に出て弦歌を楽て暮にくろられを迎富ともいふ日なの地拍の事なり

賜尺

唐制是日近臣より尺をたまはる

蠶農市

唐土蜀の國にて二月二日八日と両日かいこかひの道具を賣もう其あたひ銭貫にいくら

萬神都會

二日とりの代日夫婦のとを禁

出代

出替　今日ゝろ来年二月二日迄を奉公人の期とす京大坂は三月五日九月十日を年を期とす

(俳)出代の男や初鰹のかろ汁そ　麦林

行基忌

行基建立の所に有行基忌　ちうしたゝ一日の魚あうて縁起あり忠度のうたひ月も宿りあり

ちとしひしらかはの延喜式曰僧正行基昆陽院の雑事に持法司別当と共に撫校を知ると云く延元二年将軍弓武義捨文有

二日灸

(俳)二日の灸都　如泉

(狂)二日やいとをすたくをいきのさしもさにも成て云ふ　木端

祈年祭

中なく四月廿度ならしめんと行なふ

之昔は神祇官にて行る今は社にて

(哥)年中行事
いのつて(祈)しのとなぐ(凪)ぬ代を
そゝせあすりの神やうくらん

京 六位殿(?)蓋ちに(?)法盛の忌を
行(?)へ寺い鴨川東五條より

七日 薪能 南都興福寺南大門ゑみ
四座の内二座休眠然
う見とゝ(?)むゝ十三日まで取
に入りてつとむゝ是(?)ゑ(?)ゝ

(能)地うたひの聖さ(?)ゝ 沾徳
拿(?)ゝ蔡の能のあうゝ通し 其角

(狂)春日のゝ蔡の能ハ名ゝ(?)ゝ
とゝ(?)ひの神ちいでゝ(?)ゝ貞柳

春日若宮能 九日ふゝ南都若
宮のゝ(?)ゝ能を

勤む十日も同(?)十日
ゝ十三日追門能ゝ勤

八日 今日白髮
とめくべし

占風 東南の風ハ水
西北の風ハ旱し 祇園

八講 八講とゝ法花八の巻の大
意を論ずる 今ハ絶たり

九日 遺教經會 釈迦堂大報恩寺の遺戒の
経ゝ糸千本
ちゝて行ふる十五日まで有
ゝを ゝ誦讀會ゝ云

(俳)多ゝ(?)ゝ千本ゝ松や洲流舎 通理

泉涌寺舎利開帳 十五日

祢ゝん 係ゝる 貴船五穀祭

十一日 列見 六位以下の藝能
有ゝのゝ撰びて式部
兵部の二省ゝ(?)ゝ
ゝる政官に参ゝ(?)ゝ
容儀をゝ(?)ゝる上ゝ下
氏ゝ冠ゝ(?)ゝの列あり

十日 成曹 京 北山鹿苑寺祭。同
天神祭 社人射あり

(俳)列見や蒙石ゝ伸と烏帽ゝ(?)ゝ其角

(詞)百姓屋かざゝ紙ぬ(?)ゝ

十二日 **百花朝** 此日をかくいふ 彩雨百花の朝

白候 十二日天氣快晴なるの實よし 夜雨ふれいあり しろくの木 大抵二月は夜雨をこらしめ

南都二月堂水取 大續松

二月堂は羂索院と云 天平勝宝四年沙門実忠建立 後に閼伽井有是と俗に云 抜の井と云 皆此井のみと取て修法あり

(俳) 廉そそむ都の南大法會 丁史

十四日 此日とをくの行といむ

十五日 **花朝節** 百花生日ともいふ 春さいはひ花と賞

占候 此日と紙鳶の日とし晴まば豊年 風あれば飢

蝶會 唐にて花朝をもつて蝶撲會をなすし

蟹市 此日かいこの蟹を買うこと 微親すし

涅槃會 但槃像 二月十五日 佛のかれ さり 佛

○此日釈迦入滅の日とす然るにこれ是は月の二月にやまりあり 物語 破和漢に法の鶴王の十二年 二月十五日佛涅槃すこと記せり

周の二月今の十二月 流俗今改ぐさし ○釈迦如来 人間 教主と称し 抱戸那城 河の辺娑羅林の中にかくれ 志といふ其 ばくん像 中うも治東寒 福ちの 仏 厩司の更 日本書紀の天暦

(哥) 後拾遺 光源

いふ〜のこころれの庭にうつるこ
ろ人は花ぬ春ならまし

(哥) 仝 伊勢入道

世とてらす月かれ中さかゆ

あいれやこよやみるさとひろん

河 陸の名。さが。世捨て。古ち。路の林

俳 死よまてまた咲きら死や死の時 義

仏業の眼ところれねこん 像 蕉角

不とはこい様の死こと月 教 は

いろくに弱ろこいらんねこんの日 場 落

狂 佛でもそれは遠遠の名なれや

ねこん像こいかけたりかけこと 志 相

雪果 仲まこの節はてこ

能 松の梢こうけそ 陸 の 死 射 流

嵯峨 狂 續 松の踊 踊 見 釈 迦 葬

なる 遠 そ なり

山崎寶寺 法 え 三 の 儀 庭 帳 行 基 弘

大坂 天 満 宮 系 日 弘 こんの

金 式 文 常 系 舎 と り 人

南都 興 福 寺 常 系 舎 ま り

金 岡 の 子 れ ば こん 像 と 庭

常系とはれ

はんこくふ旧 豊前 旧名八日

る山なり 麦の 餓花前 十

日ふ花くそこう人てもらのちい

さ花を安花屋こう八餓の屋三色

十六日 積塔 光孝天皇の御子

雨夜の皇子八三百人

とあいまこ後八し 後十七日ち

雨夜の皇子の御 忌日 式日 拠 接

レストの死 系 金 後の小 数 場

聚 菴 仕 祭 り 接 場 舎 と 帳

京幸滿寺 日蓮 庭 帳 あり

系 極 通 経 馬 仏

の南にあり 祖 師 像

のこと 称 著 聞 集 左

十八日 日就成仏 峯定

ト 寺 観音會式 くらぬの

北六里ぐら

にあり 大 奴 山 と 号 す 白 川 法

皇の御 建 立 こ 一 坊 あり 修 験

都なり此日風はげしくふれば世に大無山のあるこなりとぞ

十九日　貝寄　天王寺聖霊会の曼陳羅華

俳る貝成行右のうらへとりよ
ひく山日右貝をそよしの浦にあるる
八幡神ようをそなへくるあり
此日の門と〻貝寄門といふ

哥　續後撰　天徳大臣
今こそくにたもたハまこなうまん
羅漢のちるの人ゝこれ貝

俳　貝ぎや神に奇ひゑんせぬ千那

観音誕辰　此日と記す今十八日

とぎ甘ーハ日　けあるこ〻

廿日　浅間祭　信州浅間嶽ハ

今二月冬ふなり　此月八日に山
口をひらく此日とゆるりそ
○諏訪二月廿二日駿州安倍郡浅間の社嚴
重の祭なり是を〻浅間四つとゝ

哥　不あり社神に奉と詠ふよ
俳　今ゝ〻に沈乃家の砂烟　乙由

廿一日　普賢菩薩　奉き沢ハ
地拘釜を

廿二日　大坂　天王寺の〻聖霊会の修
人参あり堂を

聖霊院ともいふ廿二日をその像を
閉繁代六時堂にうし西一舎利
二舎利をかの伝法寺あり
堂前なるの奉を奉に奉ふ奉あり
紀ようあに入て落る是に奉
の外かく行ふく事ハ入て
教院此寺年中の法会の
中にも此日代第一とす大なる
花台を奉ると奉屋の四隅に
たつる廿一日試奉あり

哥　源氏紅葉賀
からくの紙ふること代々まと
立居よ花けておれとへみき

俳　厚雪雪舎後
宿雪雪翁もあんて去にくゝ　瓢水

(能)我さ江風しゆめぞ聖天令毛臨

(狂)天さちの業成さて　あ末

何ひとなく面白さそうにきこゆ三三

金石糸井　麹土退屈

太秦廣隆寺　舎弓式さ五堂

仏菩薩彫像

京　後鳥羽院　元年五月加茂松

の下家にこもりとどまり御

まき　春こ雲錦又

西蓮の書いたろ　桓武天皇十

糸弟白髪にれたる

五年に始る仏日必ずとはあくろ

紅の往来とかくきんどろ

(能)さく浪よ永もハ篠ち月ゆ帯霞

廿五日　京　小野　△天神御　菅丸

天慶　年中小野　社を建

ちるあよ入く西の糸ゆう供物を

供これと△業祥の市供と三武日

右禅院に八講あり公事根源

曰三月廿五日ハ天満大自在天

神のかをあぐ後入く御日し

菅の若ありて名るお院天仁

二年ようう右禅院ゆて八講ろ

菅家の学者参りて名と約ム

云く本朝文粉大江匡衡曰天

満自在天神ハあるひハ天下に

流播一人を補導し天上て

月日こゝて為民と恐除し

紀中文通の大狂月の執

もとゝ云へ梵灯菴摩宮のこと

元暦山住心院の僧職心敬伝

都ゆ聖者に於て連歌と始

歌ゆ　人さおうてかる世くまと

云句に列いろの猶うのたらく

ゆるらんと御うられたまハ天神

歌ありてゆ糸抜ものの天事ゆ

ゆの巻物浪の老二巻と接け

たまうゆてるんそれうう慶

中ゆ偽称のやしろ成た

てくけゆ聖の宮といつう

或曰見性成佛信心不昧水月

俳 蹴はねて柔軟と俗人信仰邪水月

河内

◎通ぼる 今日は目黒の本尊

開祖弘法大師は貞観五年の開基なり

推古帝の勅願聖徳太子の開基

なり天神の市社あり天慶元年

天狗と変化する三百石補あるの名あり

日六廿 不滅日 日八廿 天

和の部

◎俳諸 ◎歌 ◎連歌 ◎天和の頃

月令

二月 ◎紀八日 ◎彼岸

三月の中の日

彼岸

春秋二度あり七日の名心ひゝんの中日を俳氏号て中日とゝひ

又時ともいふ伝説信仰の法徳し

て仏に供すると彼岸者と云これを

彼岸のひとし紀を彼岸のひとし

きに比して比岸ともいつ

哥 あふみの琵琶の海の夕日うそ

西ふさ〻る光りうしなき　西行

哥 西行まよひさとり法師て

南無阿弥陀仏の名号を唱へよ一遍上人

詞 極楽。紅葉。稚木。入日。花ふる。

俳 ゝたちの花うちこす彼岸。支考

さ〻〻さくひとえにこのひゝ花月

る我及の名もこらやもひゝ八ゝ朝更

狂 くるゝなるゝ十万億土あまよ

かのきゝ乃ゝ

○林道春野趣にへゝく或傳

家の説ふ彼樹者薩陀の花を

引て教辛天の例よ美所

甚ありそこに樹あり二月に

花ひゝく七日七夜にして

落る秋八月七日美生ドし

梵天帝釈名第て七月

の間世るの善人悪人の名紙下

記す生死彼岸渡船本彼岸

友曰宜取七日修善業上く

れ春秋七日の事とつくりさまどもい事たらうなるぬるを砥平
石の録ゑ彼岸ハ日本の風俗
ありと委くくハ歳時記ふ出さう

茶の子　畿内の流俗ゑり七日
の間亡人の日ふあれば
野菜の食類と知音の人ふおくる
俳彼岸会の茶は茹て山芋豆腐白羽

(此)彼岸迎僧　庁カ十村八尺牘

我等亡母尚彼岸中
先慈諱晨偶中彼岸
月い因ゑ摘菜蔬供
會頭設蔬齋伏乞玉
靈おい付迎沛俗説
趾臨敝廬為修其冥
福則存没均感賤价
経聽聞敬度い心路

九州若芳州加賀奉行い
謹言　奉賣　上中下

(尺牘)書状　上中下

玉趾(上)室扶　獅屋(上)
女屋(下)　飛錫
奉賣(下)　賤价(上)上小伴奉告
(下)銀麗以頓

彼岸　天王寺参　彼岸七日の
日俗切ようり
生て暗りす男女弱糸と中
も婦人ハ衣れとかざり拭一
ゑ競ひ生て　拭とうひろす
ゑ赤のれ長参ゑ　ひし
俳諧も紙ぬぎかけて彼岸ゑ支考
彼岸ゑ山浪流る春ひ日ゑる潘山
狂内ハひぐゑ彼あも矣当で
れちの世話を紀至麿ゑ　一朝

同踊念佛　天王寺念仏堂
ふて法ゑりあり
天王寺の名ゑ廿八菩薩
の画像ゑかけて彼ひす平地大

念仏寺より北へ来る又西門を極楽の東門にあるなり 昔ここに西海の人目を其下にあつまり西門も此西門紀ぞるし弘法大師も此西門

まひげん中日の弥陀法花経を修し給ひ

入日をおがむ

俳 おがるるころ伏見の名石御殿

京 御景堂 ○時宗踊念仏

又條橋西にあり 毎年

芸秋二季の彼岸 踊躍念仏

あり中世こ来尼と称へ

庵を制す 御影堂 高倉

ち号 式部 岩光寺と云ひさ

ちらに仏恩を謝して余会

なくれどうよ伝てぶのらさ

法花経ふ此 文義あり

一遍上人

哥

さねばくるわれぞうべおもふ法花経の法のみよいかなぞうしぞ

狂 世いこれて妻孫の為ちそえて

ゆくの形新堂踊念仏 声可

社日

立春より五つめの戊の日と春社と云ひこれは

土の神とあるく土ハ万物とやしなひ五穀と生す春ハ農事の

よからんこの式いのるし秋ハ其恩

徳と報ぜる意たり燕ハ春社

日に来り秋の社日に帰る

社日に教よ蕣め斜水

俳 うく来ぬ

社日 敬事

共工氏子

左傳曰共工氏子勾龍と云遠遊と

好舟車のいろる而足の達をる而

窮めんとすとうくて能水土と

平ぐ故に祀て社とす勾龍

と風俗通ハ脩〻

方壇

壇と築きて土地の霊

祀る豊饒とへいの

陳平分肉

前漢陳平里中の

社の宰とる肉と

分事甚ひとし父老曰善哉陳孺子が宰たるや陳平曰嗟乎我をして天下の宰たらしめば亦此肉のごとしと云々

治聾酒 社日にのむ酒を云 石林詩話に出づ
社日に酒をのめば聾を治すといひならはしたる故なり

詩 兵部 李濤
社公今日没心情 為乞治聾酒一瓶

社羹 唐呉越の俗必羹をもって祀るといへり

社翁雨 社翁は祭る礼水を食せず故に社日必ず雨ふるといふ

詩 社翁ノ雨五言詩
幾點社翁雨 一番花信風
社日ノ雨ハ草木ノタメニハ父母ノコトシ三ガモ年中一番ノ風ナリ

詩 社日七言ノ詞
今朝社日停針線 起向朱櫻樹下行
社日ニハ女ノ業ハリシゴトヲヤメテ見ゴトナキク桜ノ下ヘ行遊

男女嫁娶 周礼媒氏の注に陰陽交を以て婚礼をなすは天の時に順ふといへり されば此月婚姻によろし

紙鳶 春の風は下よりして上にのぼる紙鳶をあげてあそぶ

俳 きぬ極や霞なるいかのぼり 支考
秘蔵こや遠末の抱せて凧 百猿

狂 いかのぼりあげてのあれは凧の細工はやうやくとなり 木端

紙鳶故事
風箏 箏ハ琴也漢李鄴宮中ニテ井ニ紙鳶ヲツクリ線ヲ引風ニ乗シテノボス後ニイカノ首ニ竹ヲ以笛トス風ニフクメハ聲コトヲナスソノ声箏ヲヒクガゴトシ

夫巳宮ノ部

漢高祖陳豨ヲ征スルトキ韓信紙鳶ヲツクリテ遠近ヲハカリミテリ

得子 二月乙酉の日午ノ時ニ夫妻小枕に亀ハ四孕む

初雷 ○ △初雷 仲春に初めて雷を

けいちつ 虫動く ⑩ 信 虫虫し

とり人雷のこと 妻ハ博物答ふあり

(哥) 古今集

天のふることでろうしなるかとも

おり人中をいさるものこそ

(詞) なるくみ。そろく。ひくく。

こゑ。おと。クをえ。

(俳) かみなりに情をとゝ寿の折り 左近

「雷や他のまゝるこゝの ⑩ 嵐雪

「雷の始るれやまゝの父母

(狂) みとゝなるゆゝくもゝまと

おちよしだよいおもいこうめと 遊山

(詩) 雷七言對句 詩楚

響滿山河傾地軸 擊枯株

光乘風雨入天都 急雨過

三國英雄空失勢 對雷光

一鄉孝子爲傷心 聽春雷

(詩) 雷五言對句 (詩) 五言對句

山鳴喬木例 滂沱無所避

水激蟄龍飛 霹靂不堪看

雷電 聲 人君之象

雷八二月ヨリ百八十日ノ間

二地ヲイヅル時萬物モヲタ

地ヲイヅル八月ヨリ後百八十

日ノ間地ニ入ル万物モヲタ地ニ入ル入ハ

害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

雷槌

陳ノ時蘇紹ト云人雷槌重サ九斤ナルモノヲ得タリ宋ノ時沈括震木ノ下ニテ雷楔ヲ得タリ斧ニ似テ孔ナシ○時珍曰。雷書雷神ノ佩ル所ノモノニテ其落ノコリタルモノナリ云ク

○本朝ニテモ雷ノヲチタルマヽニテ異物又ハ矢ノ根ヤウノモノヲヒロヱルヿ諸書ニミヱタリ

雷除ノ守 越の白山鶺鴒といふ有其ゝとちを畫ておけばこれ雷雖とのがるくたれ名あり

(哥)後を將院御製

ゐ山のねれ木陰よかく
ろいてやそらにとろく
鶺鴒

候霜

霜の日ようう百八十日めの秋分をこえて中ようう來る日を十八日めの春ようう來るなり

氷口祭

稲ハろにあくされハ代水をいろくくとあるくまろう湛ろれば苗痩ろれば苗腐ハ九日を經て苗ろハーるろとよみもべあ湛ろをとよしとす其外水の冷暖などにようて氷口をあらくめるもどもとろ考へうまけるハハ八十串に幣さしはさゝてあロろさすなり

師光

(哥)夫木

ますゝをろうるてのうふいくまゝて水ロまろうねどハまろうり

(俳)あロの不平庵をのぞく雑沙 許六

ろろ五ゝ六ハ白くいぐーるる芭蕉

田畑野山を燒

ハ地を燒て移る所あり是を火米しいハ和名やぐそくとい

て焼て後耕つくなり又田畑をやくハむしの根をたやすく肥ともなりやけバ地よく生るなり

(哥) 古今　業平
春日野のハけふハなやきそ若草の
つまもこもれり我もこもれり

萬葉
冬ごもり春の大野をやく人ハ
焼たらぬかも我こゝろやく

(俳) 去年も君がへぜちし山を焼　僕京
「跡をやくや男は南さ羽にかえ　左父
「畑焼や春のもえつた葉のかげ　許六

(狂) やきぬ春さへ今も火をたやさず雨の
花火への野ちらせ露もやくらん　太中

季御読経（きのみどきやう）

二月八月に内裏にて大般若を転読なる

(俳) 此時僧に茶をたまひきと薬をこらへ
ときなひく春の御読経のひとさとう　芭蕉

草木

此部ハ二月一ヶ月の草木のふいをあつむ

苗代（なはしろ）

先籾種の俵を水にひたすを川などに漬し後取出し七日を経て他田に蒔なりこれを苗代といふ

(哥) 夫木　俊成
たのもしなきゝなるしら川をせきわけて
ひとしめひくるみづしろの種

拾玉集
衰なり山田の沢ハ苗代乃
あまのこゝろしんひくらん

堀川百集
又春せハ小田の苗代ゆめよくて
たねまく程にあるなるかな

(連) 「苗代ハ今も秋まつあさうかな　肖柏
「苗代ハ秋をたのむの田面かな　昌叱

(俳) 苗代や箒ひも得て行くのたね　支考
「水澄て粗の芽も立苗代田、

(狂) なかしろと人ハ見れども秋のそこさし
縄のきさくあまくしるしをくるよ　貞木

苗代茱萸（なはしろぐみ）

二月実熟ス大さ小豆の如くなると云

哥　夫木　苗代菜黄

小山田の苗代菜黄のまをとて
ちりぬるかのをとはやまのくるる　天川　黄代田

俳　菜黄の実をも秋とをもふ　芭蕉

種浸

菜とりのるに先彼屋の
おの種をあらひすを彼
岩淡より取出し種を下すく

詞　なし伏　種おろし　種おろし

哥　千首　爲尹

種ハすりくるやひくに小田の
たく一とすちの苗代のあ

種井

哥　新選六帖　爲家

種を漬る井ををつく
ろさんのあせのかうひいをして
たる井のいなねくやまにをよろ

俳　おぐらなの本に禪尼種井式考

湯種

農人種をぬる湯に漬
てすけばまく生ずと
又漬たる種を火のかをとらて
おくめるもまく生ます

種蒔　種し　種下

哥　夫木　國信

紙のとち苗代ろをあせおさて
入うて種井に種下しける

俳　種下　依こうて沢小指が其角

藍麻蒔

俳　孫つれて麻蒔
畝のふるか　芭蕉

蕨

異名　紫塵　初せをふる
きけてれと今ふ小児の拳
の曲るやうにもえ出るなり也
して紫をひくけハ鳳尾の比

高三尺ばかりおよそ其根紫色
皮肉赤くらして再三ひく
製法とれハ葛粉とおなじく
用ゐるなり

詞　さるくひ　かきるとび　おるもの　和家

哥　新拾遺　さらひ今

ろくの日ハまくかこのかさるひ
ちけハまくくんあるるくる

哥 万葉

岩そそぐ垂水の上のさわらびは
もえ出る春となりにけるかも

哥 亜槐

山里の春のさかりをたづねてと
かぞへまほしき人も有けり

詞 かきつばた。こぶ。さわらび。さわらび。
○りんそう。○小菊。かきつばた。

連 むらさきのちりとすぎの蕨哉 総也
むらさきもあるべきものねさしくる 玄仍

俳 あるじ呼び出でや初の花 蓮三
山ふかみ人の行かぬ梅の紬の内

狂 ふりあげさまざまこそぶしいかるよ
あるさんよりふすまをしたりとびめんん遊山

詩 蕨 薇 詞 杜子美

雨足空山蕨脆春深蘿紫金莖 雨ハフレドモ山ニ未ダワラビモエイデ子花春フカクナリテニヨキトハルノ紫金莖ハワラビノ名ヒ

伯夷不食

周家粟未必先知此味清
昔白夷力首陽山ニカクレテワラビヲ喰ノメタルユエニ今ノ味ラシルソレマデハシラナンダテアラフトナリ

詩 蕨七字對句

詩礎

承露未開仙女掌 元無骨 ワラビニタトヘタリ

擎天先出小児拳 已作拳 口上

【口中薬】 わらび 葉やさき 三月あるべき
葉やさき 昆布の石付 葉やさき
右合せて絞よく合くめん
【西天鄙之薬】 わらびの粉と粉り付る

蒲公 【異名】 僕公嚢。蒲公丁。黄花地丁。白鼓釘。金簪草

【和名】 ふちな つぐさ さもいふたん
不つぐさと云より出さるるべし

哥 花さくも人やいさめのほゝみ草
若かりき世のさをもれしてそ 公通

俳 たんかやなぎも一さし 蓼太 行雲
〜〜袖の繪ごろ 野牧

狂 たんぽゝあさしもあるれ秋立と
えびく絃とゝやびく ゝろり 左久

杉菜

上菜のたけて茎ふと逸たるをいふ或ハ形土筆に似て別なりとゝざるといふ艸あり也ハ杉菜と白茎ふ杉より似ゝる故よ名づく

哥 藻鹽草
かゝとの去げがゝりにすひよりゝ
ゝゝざるゝ〜ゝのつくし こうる

俳 さつゝびもゝゝゝにて苗板なれ言水

狗脊

犬ゝゝびの脊骨のごゝゝくの
かゝちわゝひよ似て味ハおゝる故
犬ゝゝびと名づくなり

異名 尓紫蕨 ○ 蕨 ○ 迷蕨

俳 狗脊ハゝゝびのゝへの一ゝど 春理

枸杞

女艸に曰枸杞春ハ青清子と名つく葉ハ枸杞葉

ゝゝ如ゝく秋ハ却老子と云ゝは地骨根と云の地骨皮ゝゝハ根皮ゝ

枸杞故事

逐犬

朱孺子幼ニシテ道士王元正ニツカフ巖ニ居テ一日水ヲ汲ケルニ犬ヲ見ル孺子是ヲ逐フテ枸杞ノ叢リ生タル下ニ入ケリ是ヨリ是ヲ服シテ仙術ヲ得タリ列仙傳ニ王玄真ト云フナリ

俳 枸杞めゝと書ゝゝ 孤屋

痔薬 枸杞の根つゝたぐらゝし煮て煮へ汁ゝべゝ病を治す

五加木

異名 文章艸○八角茶・五佳。一枝ハ五葉あゝと逆ゝゝ若葉ゝゝゝて食用ゝゝ

俳 老伝の腰のゝて居ゝゝ五加木飯 甚技
〜〜都てもこゝゝゝゝゝ

虎杖

酸桶筆 酸杖○虎ゝゝ
今ゝゝゝ味ゝゝ故に名付三才
図会に出ゝゝ古名タチビ 山中ゝゝゝ
高丈余の和ゝ夏秋花ゝゝゝゝ

淡路宮 日本紀反正天皇淡路宮ニ生レタマフ

井ノ水ヲ汲ミテ太子ヲ洗フ時タチヒノ花オチテ井ノ中ニアリ故ニ御名ヲ多遅比瑞歯別天皇ト申シ奉ル

(狂)日かハ扶ゐ仕て久てひよろくと かたけてもろ汐の虎うる　桃綺

韮 異名 長生韮。翠髪 和名 古美良 ○美良万葉集ニ出タリ

中心韮を抽きて白花をひらく　枕

生のものと山ごらとりくらう

(俳)経る秀てはゑ韮のみざれ髪　陽水

耳くむしーの入ゝると生すら生すらの

汁と脆ゑ合せ耳へ入まてむしーの

入ゝざるゝをよくとおさるべし

蒜 異名 美菜。卵蒜。(和名) 比流 ○蒜 ふハニホヒナリ

ハニクムノ心ノ香ノ臭ユエ名ヅク　**野蒜** 苔忽之野人皆食之

韮蒜故事

倭建尊 日本紀景行天皇第二ノ御子日本武尊東夷征伐シ玉ヒ山海ヲヘテ信濃ノ山ニ入賜ニ峯ニヲヨンデ大ニ飢ツカレタマヒシ故ニ山中ニ御食ス山ノ神コレヲ見テ白鹿ト化シ王ノ前ニ立テリ王アヤシミテ一ツノ蒜ヲ鹿ニ彈カケシバ眼ニ中ツテ死ニケリコヽニ於テ忽道ヲウシナヒ出取ヲシラズ時ニ白狼来テ王ヲ道ヒキテ出ルコトヲ得タニヲ

源氏品定 さくきてのきたのあるひすめたちこうてさあらぬるよむすめこれに蒜らひて仕れと共ゑ世女仕ゑ

たまくしゆとさくかゆのうるさしるきクきるよひるすくせこい　ゆうあやなき

薤露之歌 齊の田横カ門人歌ヲツ

クリ　蘆上露伺晴明朝逐復落
コレヲ蘆露巷里ノウタトイヒテコノ
人ノ悲リヲオクル時ニ
ウタフタリシナリ

夜雨勢

郭林宗友人ヲ見テ夜雨ライトハス
韮ヲ剪テ炊餅ヲツクル今
洛人コレニナラフ杜甫詩ニ

(詩) 夜雨前剪春韮
(俳) 思ふ〜やら葱うら思ひ飛ひる邦野坡
韮摘さ侘居の窓ふるさとの言水
咲ひろせ〜合歓木の移り条絲　芭蕉
(狂) 後ひて捨ておそうてんすくの
慢こうにさへ白〜なりくり　平田

妙藥

瘧藥

にんとく三胡椒七　右搗合せて
一丸こ〜ゑの時の内らくよって
ゑ飲さべ〜男は左り女は右のもと

疔ノ藥

咲ひろる葱やを搗て
肉にてあり飲てよう〜

霍乱藥

〜乳せんとする時は
大さんしく四五ッ皮をさき脇の
ふくろのあつき土一塊に十を
まぜ汲立のあにたくの澤をうう
に中へさくぐべ〜ぬうう

胴藥

咲ひろるの実子て鮑の白
るをふ〜搗こうて用ひ

女葉蘇

とひて口中のふはひ
を去ろうは隠ようを服をも
かゝてはをそ〜ざてう〜

水葱搗

一名醉菜

○三才図會にあるふひ蓼〜
あり紫色似〜なるさこう〜ふ三
種あり。淀尚。沢搗根。水葱
ことの日名部根なり

(哥) 万葉
芙蓉ことがの里のうくこなるさ
苗育このふ〜ふいさ〜ふたろん　大伴宿禰

(俳) 水葱搗とな〜や隠もよこ初ん　半月

△蘆花（異名）護生草 三線艸 とりくの毛白し 小児氏

草の茎とにくらくまたは張ひけバ三味線の糸なるなり花は撥のごと

（哥）家集 好忠

屋の面にながるるの花の茎ゑくと
茎やそ清ぬるうとをおりく

（俳）ようこれがおづるみ花咲姫根邪蕉

（狂）ひくこうくこう三味せん茎の名ごこと
なくくみとこそとれたけ（ぬらめ）鯛一

△茱花 茱しらくけ加つらく茱 たねと（俳）この花や蔵し是二ゆるるの名

△大根花 白白し 大根の花ごと 一畠方 蝶をとなくり

△鬘草（俳）かづらこ紙の下 ちて茅ざれ 鬘室

△末黒之薄 神中砂に牛の 枯葉ときとくく

一茎ときこきの茎ふの茎の茎き
とくくこもくり

（哥）夫木

下もえのすくろをたらふ茎ゐ
やけのくすに花ごらくり

（俳）茎凡ふくくすくろ紙邪 挑書

△草芳 崩生る草の加ばしく 秀ゐるとくかり

（俳）芳しやくきの山の名解ごて方磨

（詩）芳艸之詞 文選 紙草

芳草生兮萋々 王孫遊兮不歸

（詩）芳草七字對句 詩樞

情如芳草連天碧 穿巷陌

身似楊花盡日狂 如有情

△草若葉 芽出しくる

若草しいみて

正月の季ゐり少し長ト
なるとくく△菊の若葉△蔦の
ワか葉△萩れくり葉

（俳）若ゐる紫ゐねるのも大ゐを蕎

[illegible]

萩之焼原　萩の芽ぐむ

初る黒き芽あり是を焼ぬ

いろ〳〵其外説いろ〳〵あり

いもゞ花ゆびらうあ〳〵ば

爰ふつゝ[illegible]

然名と心得てよろしかるべし

寂蓮

(哥) 新千載

[illegible]

(俳) 焼くさもたゞ[illegible]

[illegible]

芦角　芦の雅　角の組芦　芦葦

芽　○葭ハ芦ノ[illegible]

石川女郎

(哥) 萬葉集

我[illegible]耳よく似るあしひの

あしいとうせつゝあたゝへし

(連) [illegible]

絶巴

(俳) 洗[illegible]

[illegible]

(狂) かゞろなくあ[illegible]

[illegible]

野相公

(詩) 七字對句

紫塵嫩蕨人拳手

碧玉寒蘆錐脱囊

艾摘　通俗蓬の字を用ゆ

[illegible]

好忠

又食あるよもるる[illegible]

(哥) 家集

あ〳〵小田のそぐれ[illegible]

今ハまそ〳〵しひこぐ[illegible]

俊成

夫木

なを[illegible]

[illegible]

百人首

實方

かゝ[illegible]

[illegible]

俳 かるげころ冊子を五月雨の文ゝる 由水
ふり袖のころれ白ひいろ紙 晩水

妙薬

艾ところ〻せ脱肛を浸ぬ
此に洗す 倭病病法せん

若紫 異名 紫草

日ゝ白ゝて開く根の
度ゝん徹布を染の昔かをうて
衣を染めゝ〻ゝ見をとう衣ゝ云

哥 伊勢物語
かをぐめくあひのすり衣
きの〻人のみだれかぎり忘ゝも侯

俳 むらみく見ひゝゝやすり穴寸立圃

狂 ちゝゝれ見むゝゝはむゝ形く
ゝゝれ白ゝりの陰ゝ生ゝ形

接骨木花

茎葉に花九つて花ゝ茎八
ゝ数十花横接す臭気あり
花て後ゝ実ふあり赤と紫して赤撰
傷板を洗ゝて切有ゝこゝ方三骨
と接ぐの文ゝまたり

俳 関ゝの冊に男人ひゝ塚骨材花寛菜
病氣藥 たゝの木に甘草入てせんじ呑べし

銀杏花 異名 鴨脚 青白ゝ

花の色
二月ゝ開
陰て落ゝ方ゝ人見ゝとゝんゝ八梯ゝ

俳 うゝ行ゝの白ゝく根ゝ浪花ゝ花盛 芭蕉

紅梅

秀もゝ人あんゝと仰ゝう

△ ○ 紫梅 和名ハナサロ。梅なり一説に紫梅多く紅梅

○ 麗枝梅 和名三ヒカヅイ 実ゝ大ひゝ

○ 紫梅 和名スロウバイ 花ゝ大にて紫色 開ゝ

○ 服梅 花ゝ大にて紫に似ゝ 二月の末ゝ

○ 紫梅

右の外に紅梅 紫梅 紅梅 数多く
ありゝゝしくハ数多にて一ゝゝ

元補

哥 新千載
ゝゝこのゝゝ行やまゝこれ一枝梅の赤
ゝゝゝゝのにゝく白ひゝゝゝ

哥 新後拾

ふりかゝる梢の雪の紅あけゝ
くれる春うすき花むらくれ　え浦

哥　後拾遺

梅の花香はうつるに白くゝ
うちくゝてこそ色は咲ぬれ　道遥院

哥　家集

梅の花紅ゝ日数こゝ
和面のそゝはは枝にをこけき　雅世

哥　類類　紅梅遅

梅の花の花を
[illegible]

詞　茶の底。紅の赤。うすくとくこく
。枝の末に枯さり。白ろ〜色。ふを
ゆゞ。紅のこゞゆ。ゆくほよ。末
つむこゝゆのいろ。紅のこむをほらぬく

俳　紅梅は巨燵の上をもづりん淡人
紅梅に見りて老女の夢衣角
紅ひゝゆあてゝる梅の花濃く淡く　長哉

狂　春もこゝゆひゝゆの春ゆゝ梅の
花まゆゝゆ咲ぞゆくゆ　貞柳

詩　紅梅詞　韓駒

路入宮家百歩香隔簾初識漢宮粧三千ハタノヨキ屋ニ入テ歩テミレバ紅バイガアリテ其ヨツホヒハミスフヘタテ見ーナルガ漢宮ノヤウナルゾ直疑夢到昭陽殿一簇軽紅洗淡黄昭陽ハ前漢成帝ノ宮殿ナリ紅バイヲ見レハソノ殿ヘユメノウチニキタルヤウナリ　志

解ヲバアラフヤウナリ

詩　春半花繁発多應不奈寒春ハナカバトモ花ハヅカニ発タリ　北人初味識渾作杏花看地コクノ人ハ梅ノ子ナレバ今コロ花ノサカントハ知ラズ

イフ三テモ梅トハ思ハス杏ノ花カト思フノ

詩　紅梅五字對句

照溪如濯錦嫩蕊融紅雪

隔嶺似流霞繁葩剪絳綃

詩 紅梅七字對句 詩楚

春氷薄染燕脂片 香不盡
寒日晴烘蜀錦机 酒初薰

蜀州郡閣二紅梅數株アリテ

壁上詩

聞ク時一婦高キ髻ニ大ナル袖シテ高ク三倚リテ

モテアソヒ詩壁上ニ題ス

南枝向暖北枝寒 一種春
風有兩般憑杖高樓賞魂
留大家留取倚闌看

状 告紅梅ノ盛文 尺牘

庭前の紅梅の花中に見ゆ因て招
蜀錦奪目

満開

遨士

人皆云ふ三人お招き足
足下與二三僚 奠

弁像奉撮連歌お催ん
聖像 共暢觴詠之懐

度いろ早く咲て散下い
持幕 侯

尺牘 去暦上中下と紀を

満開 芳発○芳妍○綽約○明媚○馥郁 遨士 吟客○佳客○逸人 足下與二三僚 公與同遊 中 君且負僚 暢觴詠之懐 上 將騁吟筵 中 催寛興之會 欲試賞遊

状 紅梅百本

拙く連歌を宴席に奉
梅下續詠之催趣喜々雀

多紀の花出席て仕ん

躍 豈不登臨

如何文屋康秀

文林 附馳使

尺牘 上中下 云給と紀と

催趣 促遊。展懐。遨宴

喜々雀躍 快衆心。想甚欣然

(上)新快万衆 (中)何喜如之 豈不

登臨 (上)歩而捧誦 (中)詣鏗金

邑 (上)入廣夏受奇璜 (中)馳

鶩而容吟慰 (中)参加宜唱愛

馳使 介子。僕士 (上)貴奚。

遽使 (中)嵩伶。走力。銀鹿

八重梅

(狂)紅波はの梅をとんとんとかけ白り八重ら七重腦にむりく

(俳)八重梅や尼の
多匂ひ母の墓菖

座論梅

花浅紅ゑり乗多く実い枝
ぐ〜れ四五顆むゝがりてもで
ゑりゑり人のむしゝゝ
あゝそのかたゝゝ

越中梅

花大ふゝして白く濃
紅と帯び後梅に似て

黄梅

迎春花 高二三尺ばかり
梅ハ六月ニ花ハ春花といふ
正月に開く故に迎春花といふ

(俳)鬢も美に老ます春に梅咎 児貫

初櫻。初花

早く咲く撞の惣名なり初
花いさるそある意もあり尚
三月草木の部ふくいー

人丸

(哥)万葉
位の江の里に花ん〜うゝ初花の
まゝし花つ匂ふ

(哥)續後　伏見院
咲そむる外山の花の色みえて　尾上遠くろ嵐の白雲

(哥)新古今　家隆
ちりぬへてん人志のへさ桜か　たつたの山の紅葉さくら花

△**待花**（まつはな）
花のもとに日数はすぎても　はや花も咲ぬべしと思ふ心

(哥)家集　頼阿
とし毎にへて咲すの木の芽も春雨に　花は遠しなき山さくらかな

(哥)新拾遺　俊成
山桜咲やらぬ間ハ暮ごとに　まちてそ見る春の夜の月

(排)色ゆくハ花待あそわび路　霜春

(狂)まちかねて咲かくとて待ころの花　本の下によされあらして　鳥有

△**糸櫻**（いとざくら）
糸たり桜とも
いひ垂糸とそいつの比ふ　こるひとへにさくなり

(哥)あすもこん法のちる桜の枝ならで　柳の糸にむすほゝれける　俊頼

(排)百すらも妻のためあり糸桜　野坡
糸桜色も猶まさる風みえし　京甫

(同)咲く庭も揚げけりとさそふ　北枝

(狂)たくもの庭に咲なる糸さくら　むかんた箔のように見るらん　貞大

ひとつ手のとりやもくたのやうなれど　今こそいはゆる

△**姥櫻**（うばざくら）

葉も短くて花
いでて桜ハ木端
密て美色に衣を老女の歯を染に似ふ

(排)花嫁といはれし身の姥桜　立甫

(狂)盛過ぎとうは桜とよばれつ今からハ　花のさくことはいてまいあ　左柳

△**児櫻**（ちござくら）

花白きの花瓣閉ハ
抱てあり本ほ花なり

(排)狂人のみるものに　せんぼさくら　鯨花

△**一重櫻**（ひとへざくら）
一重の桜なり

(哥)夫木　咲初さく桜みろ道ての桜花　たびひとへなるもまたなし

俳 花て出る一色を一色掃こうこ 千丈

彼岸櫻

屋の掃ろうよく咲くこの十日 ろしは花掃の
おこ春分のころ べ〜 素伴
那掃なう那名みべ〜 素伴
俳 仏のうそこ花被花掃は哉 目

狂 ますもちきいろうなう紅とや志めすらん分るつ花ひがん掃は貞 ま

熊谷櫻

よく咲 五一の谷の魁の名を名付死路 ま

種植

草木の接 まき 植
やう 接木 ま

接穂 異名 接頭。小箒子。壓木。盤砧。花 あれ

駆こもつれ枝をつぐこ二つよ
ちる 若枝の肥 望る 陽にひ
なるとろほくべ〜 接目 ま る
らん 綾うす皮と 骨とひち
がうゆ〜れすべ〜 春分と節
とするつ おにいがじと 素よ

揚枝をほげば 酸をよ〜 揚
に挿とほげば 金 挿 こうる 麥
ふ 挿をほげば 麥 挿 とうる

光俊

哥 彩撰六帖

ふ麥はいりもと木の花 麥 采
てく八重咲うるほ花 掃 うる

俳 小力のそれらふくの 接 植 作 蓮 二
月 教八 弦をはこまた 掃 木 由 水
掃ご 植のこ教の 麥 や 花 麥 り 金 雨
掃 そ に 掃 くのそく 掃 木 外 蓮

茄子栽秧

なすひ 植 は 硫黄
根 に おきて 泥 をれて 培 ひ かば
ふ と せる こと そ ふ くて よ も
もろこ〜ふ八一尺

西瓜撒

ピ ふ すのあ ふ も
肥地 ふ 坑 を ふ と 坑 で に 植 を
ピ づ ま ふ く も 苗 ふ て 後 根 の 下 に
土 を 蓮 く 盆 の ご と ふ く し て
多 く 瓜 を ふ て す け ば 瓜 多 し

種蓮　ろれんを栽べしのぼひさるるうるかひいろる泥を

栽べし柳　**挿壓**　木の下枝の土にうゑ死ぬさま

分きう目を入をたなわち泥土をよせ其枝の上よも本の方さかに土を分末の方ま分にハ土をうけず糞あをとはく土の上をくへし次のう

本木の方を切りて二月下旬に挿し栽べし五月梅雨の時分根を生

ろうものと知るべし　今月木屑躑躅等をよせたぎこにとるにはそのたと糞より或ひハ馬糞を用へし

挿木　此法ハ黄土と用ひ子細未しとこ沙と多分に節よくまとへ六七すはうり花に死ぬ

ほきかをめて枝を馬の耳れとく

にそぎ用ひ大きさ五寸の本の枝をそ先穴とあけ其穴にそぎたる枝を五寸さしこみ此ぬとそ匂陰地より色或ハ上又おかひをとをべし一月を経なう枝に至りて根を生ず

栽べし今月に木にうゑたる時植し

檜柏　**樅**　**丹柏**　**躑躅**　**漢松**　**海紅**　**海棠**　**山茶花**　**石榴**　**山礬**　**薔薇**　**黄梅**　**櫻**等し

根法　**抹藥種**　寺し

先存中かぶ法よいとく古草桑を抹るとなく二月八月と用へ

二月八月の茅ざハ八月ハ苗いなだるをず放よろに安紀のうそ茅紙ハあしく宿根あるあい則苗出来てそるをにうざる時取べし根たりていまご本裏

修樹　菓樹の小枝枯枝切り実をひもぶと大きなう

生類

以類よれハ二月一ヶ月の生類をのせ

果鳥 以毛流反カホ鳥ト云

もしとのう柔はまびらうぎ　光俊

哥　夫木

ゆうるる三宮のふれとこもハ
ふるくとつくと花ぐるうま

哥　万葉

鈴わ出ぐこそうく呆をなんぐ
ぐて恋まこハ附とえずるく

俳　良毛や二元の不二元の方義

雉 異名 山梁 野雉 前溪

の高祖の夫人ハ大辰の漳と

雉ハ雉ハ野雉と長尾雉ともいふ

とうり人ハ今も雉ともいふ

和名抄須○昔人毛ハ雉子魚ハ

鯉を言上とふる○ほまて茅毛ハ

雉子ハ左ねるきりの子ハ猪の

うくるか　ふるもうるかうす

其外公ふ紀ふ（いせ物語ふ）月

ぐうに物のつ行枝にとをそけて

哥　ふるたのむ系ぐ為ぐたのに れる系ハ

ふ紀しもうるぬ物ぐありくるる

詩　雉七字對句　詩礎

田夫就餉還依草共啼花

野雉驚飛不過林起平原

詩　雉之詞

白雉振朝飛声来表太平朝廷

二白雉アラハレ年号トセシコトアリ　楚郊疑鳳出陳寶

若鷄鳴　夷鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現スカ

似ト疑ヒ声ノカヤカ十九ハ雉鳴ニ

童子懷仁至中即作賦成　愛

セシ故事ナリ

翼君看飲啄敢分獨含情

未食スル体ヲ見ヨスベシ

諸鳥ニスクレテミユル十リ

雉之故事

傳母悲 春秋ノ時衛公ノ女齊ノ太子ニ

嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ケル

カ遂ニ帰ラスシテ死スソノ傅母コレヲ悲ミテ女ノ常ニヒキシ琴ヲ塚ニモチテ埋ケルトキタチ一千塚ノウチヨリニツノ雉トヒ出ヅルヲ見テ傅母イヨヽカナシミテ琴ヲ鼓テ雉操飛操ト云楽ヲ作ル

補 魯ノ蔡王中年ノ今ハナル其所ニスミケル童子アリ雉ソノ傍ニアレドモ捕ヘズソノ故ヲ問ハ雉雛ヲツレタレバコレヲ捕ルニシノビズト荅フ是蔡王ノ政令邪ナキニヨリテ虫境ヲ犯サス鳥獣ヨク化シテナレシタガヒ童子コノ仁心アリコレ三異ナリ云リ

燕〈同巣

和名豆波久良女 異名 乙鳥 ヒヨ鳴声ニヨルナリ 玄鳥 ゲンニヤウ色ニヨルナリ ○鷙鳥 鷲鷹 ○食鳥 ヒツヨウ肉ノ赤の義 鷙鳥の義 ○刻 刻すれば鷙鳥を制ス

波波 波波ハ鳥ノ名ニ有リ 天女 人間ニ生ル天女ニ号

○春来リ秋去ル甚ハ花ノ時ニ翻リ仰キ見ル捷シ直ニ翻リ仰キ

花ノ色ノ深ク浅クアラヒ人家ニ巣ヲ作ル

哥 建久元年百首 定家

春ヲ経テ花ノ色ノ深ク浅クアラヒ
帰ヤ来ルト法ヲ待ツ

哥 家集 頓阿

ハヽ去ルモ古巣ヲ捨テヤ春ノ雨
やどをとるまで花ぞ残らぬ

哥 千首 師兼

ゆだるまのひまより見ぬ春ヲ
ゆはらくにたなくく燕ぞ

哥 毎日百首 為家

二月のすゑつかた
とやくもまれる花ぞ残らぬ

詞 ゆらびすむ。ほめことば。異名ナリ ○翻る。ひるがへる。○ひるがへて。新巣作む。

原脱る。かつ〳〵ぬ繁つ。いあし
よ注る糸。かこと。ここがうい
連 万の日とかる新殿の春が宵拍
俳 そ〻ろに往て逝く猶遇遠二
神を分る孤燕の秋ぶ〻ぶ 飛水
実家もとぬけ燕や社の石 向隠
心の殿に燕をうを入日哉 其角
拾わもいもも〻ぬ燕うる 去来
狂 色里に月をうばるめつぶ〻め
うつ〻しみをぶ〻てや来る紫笛
たてこ手も横ふ〻に〻も花ぶものを
はぐ〻ろ〻ろとひそ〻ろ舊道

白樂天

詩 燕之詞

羽族知机社日来 翻身尋
主入樓臺 社日ニハキタルヒルガヘリトシテ巣ツクル家ヲタヅヌル 拨雲掠雨高
還下度柳穿花去又来
其飛カケルイキヨヒハ雲ヲオカシ雨ヲクヽリ高クモヒキクモトヒテ柳ヲ

クヽリ花ヲクヽリテ行テハカヘリスルナリ 両翅拂殘
花露水一毛不染地風
埃 其飛ブツバサニハ花ノツユヲハラヒテ地ヲ吹ク風ハカヘルヒトモスコシ

ホコリモカラヌ

烏衣國裏風光好
巻子成時便帶回 烏衣國住ム国ナリ 其国カコロヒキュヘニ子ヲヤシナヒエテハ又子ヲツレテカヘル ナリ

詩 燕五字對句 口上

風簾雙過景
重棟並捜身 心飛白玉堂

詩 燕七字對句

羽翼不沾寒食雨 紅春雨
梦魂應遶落花泥 逐暮雲

燕 詩變

燕子國 唐ノ王相海ヲ過ル二舟破板一枚三

筆

取ツキテ一ツノ島ニ至リケレバ人来テ王榭ヲ見テ是我王人ナリトテ弓ヲ宮室ニイザナイムスメヲ以テ榭ニアハセケル然ルニ其人三十黑キ物ヲ着タリ榭ムスメニ其故ヲ問テ是イカナル國ゾ答テイハク烏衣國ナリ其後榭家ニ帰リ梁ヲ見ルニ例ノゴトク二ツノ燕サヘヅル榭コヽニオイテカノ止ル所燕子國ナルヿコヽニシリ

石燕 陵零

山ニ石燕アリ雨フル時ハ飛デイケルカゴトシ雨ヤム時ハ还テ石トナル

生育 詩經天命玄鳥而生商○高

辛氏ノ妃郊禖ニイノリテ燕ノ巣ヲヒロヒ食シテ契トイフ子ヲ生リ後ニ有商氏トナル

王京紅縷 宋ノ女姚王京ガ家ニ燕巣ヲツクル其子生育シテトモニ去ラントスルトキ王京ガ臂ニ集テ別レヲツク王京紅キ絲ヲ燕ノ足ニ付オキタレバ明年ニ又其糸ナカラニ來レリカクノゴトクスルコヽ六七年ニシテ王京死シタリ燕ハカナシク鳴ヲタリ終ニ塚ニ至テ死

避戊巳日 七日ハ泥ヲフクベシ廣義見ユ

貞燕 元ノ元貞三年燕柳湖佐ガ家ニ巣クフ或日雄猫ニトラレケル雌燕其雛ヲ捕翼ナリテ帰ル其後毎年雌燕ヒトリノミ来リテ同巣ニアリケル六年見ル人感号貞燕ト云ケル

妙藥 病藥 燕とこそろよしてくらべし

便毒 ベンドク

燕の屎ト云フ 牛房子 ゴボウ

歸鴈 キガン 異名 陽鳥・霜信・羽書 使者 今ノ人ハ用ヒズ

小ハ竹ノ小ハ竹ノ名ハ竹ノ

風呂 枝ノ

枝をくゝて来り春ハ海辺に
をて蚕を飼ふ時若葉とくゝて
ゆる木ハとらをし虎の按本と
其木をひろいあ風呂を焚て
放紀すこれを丁風呂といふ
故事 枝の新ノ生ること

同 古今 躬恒

春ハ来ぬと人ハ丁ふるなれど
春ハ来ぬ人ハ丁ふるなれど

同 後拾遺 國基

うすゝこにかくれむ
あめるそにうくるうぐひす

同 家集 定家

春の来れハ春の雨も降ぬるよ
たのむの丁のいとぎきらん

詞 長かくれ 遠かくれ 遠かくれ

連 ありそ海 月かな 月かな 月かな 紐巴

俳 春の夕おぼろ 里 蓮二

狂 弟なるらん ひもろぎ 野水

詩 帰丁之詞

洞庭春水緑衝陽旅雁飛

洞庭湖ノ水カ春ノ色ヲナス
時ブニハ丁カ旅ダチテ衝陽
ト云処ヲサチタカクダルリウモミカツ
カヘルリ 差池高復下欲向龍
門帰 差池トツラナリテ高クトヒ
上ヒキイニテ竜門ト云ヲタリニムカツ
テトヒユクゾ

詩 帰雁五字對句

巳辭霜雪苦　玉塞情何極
寧羨稻粱肥　蕪葭夢亦稀

引鶴　弓鴨

なくあつまうてたるつるは人の孝行なるべし○相傳に云く鶴は千年にして
十六年にして長ずる百六十年にして
数止まる千六百年ふて形定
る齢を尚ぶ故に色白し食す故に
天寿なり故に鶴は長命の食物
其嘴長し前に出て長し羽族祭
経一天寿量へがたし長仙人の鶴駕と云ふ千里
百六十年にして雌雄相視て孕
千六百年よりいふとのこと
食をとる事
あれば則ち鳳凰の飼に和る

哥 引鶴の寄に万代ふるしら
市代も長尾の滝のおとけき

詞 もろ寄。まる鶴。あま雲。
寄雲井に寄る。鶴の色ごろも。
るとをふく。長のつる。かまくらの
いつぬき川。名なしすあしべ

俳 引鶴やふる枝の三三鶴 文秀
引鶴やとぐらと水も別くる雪止

詩 引鶴之詞

寄跡舎香舎淹情加樹林
ツルガレキ〳〵ノ官人ノ方ニヤシ
十八レニテヒサシク井ルハオノレガ
任ム樹林　長鳴如有訴　狎俗
ヨリモ一サル
至如今　鳴クハ何ヤラ謂テモス
ルヤウニ〳〵ヘテナレテ
今ニ井ル　不染風塵色　常存霄
漢心　其サマハ大空ニ井ルヤウ
ニ〳〵ヘテスコシモ俗ニハナレス
會應王子晋　接雨向嵩岑
イツリハカナラズ鶴スキノ子晋ヲノ
セテ高山ニユクニアロフトナリ

鶴の警事

林逋籠鶴

林逋孤山隠居ニテ常ニ二ツノ鶴ヲヤシナフ縱セハ飛出テ雲ニ入テタノシミ久シウシテ及籠ノ中ニカヘルトキハ林逋小舟ヲウカメテ西湖ノ寺々ニアソブコト常ナリ若其留守中ニ客ノ来ルコトアレハ林甫カ童子籠ヲヒラキ鶴ヲハナツカナラズ林甫カアソブ所ニ来ル林甫コレヲ見テ家ニカヘル

上揚州

小説ニ曰人三人アツマリ各其オモフトコロヲイフ一人ノイヘルニハ揚州ノ刺史トナラン一人ノイヘルハ財宝多ホシキ一人ノイヘルハ鶴ニノリテ天ニノボラントイフ其カタハラニ人アリテイハク我ハ腰ニ十万貫ヲ纏フテ鶴ニノリテ揚州ニ上ラン

化鶴

神異録曰玄宗波斯ニ狩ス鶴ヲ見テ「レヲ射ル鶴矢ニ中テ西南ニ向ク時ニ益州ニ道觀アリ道士ドモ一歳ノ間ニハ三四度来テ遊ベリアル時徐佐郷トイヘルモノ外ヨリ来テ影子ニ謂テ曰我山中ニ行テ矢ニアタレリトテ則其矢ヲ壁ニカケテ後日其矢ノ主来ラバカヘスベシト云テ帰ルハタシテ後日明皇蜀ニ幸シテカノ道觀ニアソビ其矢ヲ見テコレハ我沙苑ニ鶴ヲ射時ノ矢ナリトテ此時徐佐ケイカ鶴ニ化シタルヲ知レリ

客来弔

陶侃傳曰侃母ノ憂ニアタリ忽チヲヨンテ墓ノ下ニ在リ客アリテ来弔フ哭セズシ二人ノ客アリテ来弔フ哭セズシ

テ退ク　倔コレ非常ノ人タルヲ
ミル隨テコレヲ視ニ雙ノ鶴ト成
テ去ル　○右詩故事共引鶴
ニカキラス鶴ノヨトヲ記ルス

鳥之巣　古巣　陸鴻　ハ栖と

云ふ多い宿と云ふ独り居ハ止
と云ふ多い集ると云。五雜
俎いとく多の巣とはくらへ
其巧を人よるたらず只一口両口を
以て結ぶ其堅固なる事大風
ふ本を拔とて巣い終に傾くこと

哥　うぐひす初音
かひのうちにきのふへ〜ほるの
るのくへなくうもなく〜ひめうるる

俳　名ハ巣にうとて奥樣都　蓮二

孕雀　子を孕なるし　雀子　家新堂舎　又朽木花

巣ひてゐると俗に其卵またらあり
其子のロ茅ちる故に茅雀とい

哥　新撰六帖　知家
人にうゑ花荘のひまの
去はしも多とい〜ゑまざるうん

○　源氏若ふ
むーさゑのうへの鉢ひるすぐめ
のまといぬきう多はうーゐると
いるとあうこのゑをあうう
隙まといふあの名よ〜ゑ氏

哥　いはしへのいぬきうかひ〜ゑ
たちあうしやうしこうんうん

俳　一見ハ孕こすめ鉢の白ミ小豆遊
茅ゑやあかり隙まに外の後基角

妙藥　痘瘡の茅　生さう茅の

角ニ而ニを切て金箔又
拔土多ニ入息をはめまやき
とーみうそ〜ずづ用もへ〜
なん産の茅　すめの巣とまや
きは香白正得ぢと葛九務
十茅ようう内の男子の小便と
あうくわかきえて用もべ〜

腎茶 崔世羽 水砂糖一斤酒一升 炭火にてせんじ茶碗に腎こます

松茸鳥 煮いたくきこと似たる色と春松の茸を食云 寂蓮

哥 夫木

源山木の香ふかき茶とうとうれ茶て
杉焙とつとく松ひゝゆとくと

俳 松むしるる名もちとせう天女 貞室

孕鹿 九の月ふくそ一つをを生とのそう○万葉に鹿
の子のひとりとゝ梅雨によりり

俳 花つまの烟りの後は孕鹿 白羽

鹿角落 角解ともいふ○茶生て三年にて其角自落る

俳 足弱の後らは茶の角 藩山

為す茶の後の竜胆茶の角 来山

妙薬 産後印まいの茶 茶の角と
はぐきこかさの茶 死て戻と童侍ら和ゆる
と茶るに移とひれくかけて上

妙術 鹿の角とあつくかるする
勢骨と加て煮て飲ます

蜂巣 蜂巣は冬にたらて冬食さ
蜂巣の内の
蜂にとり出て花の蜜をとり蜜に
醸して貯へさ。蜜は蜂の糞とし

哥 定家

うきて世をうるゝの新に作蜂の
さすらふなれ以いとくあうう

俳 勿子院蜂にあやまる千貫 幾考

蜂の巣や二寸たかてもちこと頭 甚三

茶盞鳥のさくれく蜂の紙幣 支考

狂 夏つくりめろうて似さ蜂の花と
たくさすかつまふとそうく 加木

詩 蜂之詞

蜜蜂不食人間倉玉露為
酒花為糧 蜜ハ千ハ人間ノ米ハク
ハス露ヲトツテサ
ケトミル花ヲ食トス 作蜜不忙採花忙

蜜成猶帯百花香　蜜トスル二ハ其ノ花ヲ採ルカ故カレ

サテ蜜トナリ又モ百花ノ二ホヒヲアルソ

蜂蜜糧故度

葛仙翁容ト對食ス容寄飯ヲ獻ヲ見上云葛仙ロヨリ飯ヲ吐クニナ蜂ト云ル冬ニ公ノ家ノオトヾシテ又ニ納ハ飯ト十ル

蜂飼大臣

十訓抄京極大政大臣宗輔ハ山蜂ヲ何九ト名ツケ飼玉フ故カク号

窓中蜂　神瓚禪師蜂窓紙ニアタリテ出ントシテ出ルコトアタハサルヲ見テ世界カクノコトクヒロシトイヘトモ出ルーアタハストエ

妙藥

蜂にさされる薬　蜂の巣を

女竹の葉をとりて一束にきり三束に三升入て二升に煎用　乳の出る薬

蜂の巣を黒やきにして食すれば妙術　蜂と

蜂の巣を丙丁火と三度と出

たるに地に付そそ口の中そそもへイテイ火と念ずること七遍

はて其土をあらはしとりぬるべし　寅（人をさす也）（非）寅（人ことばあそびすれば）

狂　白ひらなんどと同へハ枕草子の

ものとそこなひ　せぬと　蛾金

蝶　異　胡蝶・黄蝶・鳳車・野蛾　名　採花使・粉柏・蛺蝶

右異名ハことくく品類の称

名ハ其心の化したるものなれば

哥　古今　おの名さた　遍昭

ちりぬるをハ後ハあるとなる花を

おりひきてすもすと人ハ

夫木　定家

ゆ〻しくもあるかな花ハ人ハ

形ハ鳥の翅のごとくなれども

ちるれくもまぬく尾をたれたり

ちるれ枝をまハ後ハ蝶となり　仲正

詞　とひうふ。ちうちう。まとふ。初

蝶。花のぬる。花くにうつる。於

てくへの今れて。てくへのいろく

。てゝのそろ。ねれうちうし
。香をめをむ。時えをやべろ

連 ころもまのねよけにの角こ蝶ゆ宗養

俳 名ゆ町中に花へこ蝶うる其角

俳 ゆうゆゝ表の敗ぬゝ小蝶ゆる曽良

俳 蝶を捨ておる蝶の死ゆひ山里

俳 蝶何有の据る胡蝶ゆる川 泊川

狂 蝶くの袖をいゝと蝶なれる
人もかさぬくゆゝゆゝゆる袖辺 貞柳

詩 胡蝶之詞 東坡

双眉捲鉄絲・両翅暈金碧・
二ツノ眉ニハ黒キ糸ヲ、キヌルヤウナ赤
フタツノツバサハイロくノ色ノ金クリアル
ルナリ 初来花爭妍・忽去鬼
無跡・初テキタルトキハ花モソノ色
ヨキヲアラソヒタレドモ去テ
ハ夢ノアトモノコサズカホ
ヨキコトハイタヅラトナルゾ
○香鬚粉翅・暖爭飛品物・
多情總属伊・ヒゲツバサヲイロ
ドリアタヽカナ

空ニトビカハス春ノケシキハ何モカモ
ミナコノ蝶ニケシキヲウハワレタリ
上國万家風月夕・搜臺取
次宿花枝都ナトノ家多キト
トナレハワカヲモフ、ミヨロシ
キカタノハナノヌダナドニヤトル

詩 蝶五字對句 同上

徘徊穿樹影・乱隨狂絮舞・
繚繞戀花衢・軽伴落花飛・

詩 蝶七字對句 詩楚

翅殘懶舞・投困檻・莊叟夢
力困慵飛・過短墻・謝公名

蝶 蝶 領南異物志ニ人海南ニ浮テ蛺
蝶ヲミル大サ蒲帆コトシ肉ヲカルニ八十
斤ヲエタリ是ヲ歌ヘバキハメテ肥美シ

唐書金錢

唐穆宗ノトキ禁中ニ花開キケレハアル夜蛺蝶数万飛来テ花間ニアツマル宮中羅市ヲ以テ撲トモ得ラレズ帝網ヲ空中ニハリテ数百ヲヨタリ夜アケテコレヲ見レハ庫中ノキンギヨクセンナリ

愛花人

長明発心集ニイハクムカシ佐国ト云モノ花ヲ愛シテ六十年遂ニ飽カスイハク我生レカハルトモ花ヲ愛スルモノニナラントノ詩ヲツクリテ死タリ其後アル人ノユメニ蝶トナリテ侍ルト見タルヨシカタリケレバ其子花ヲ心ノヨヲホドウヱテ其ウエニ蜜ヲ朝毎ニソヽギテ孝養ノ心ニソナヘタリトソ孝心ノイタリカシスベキコト

荘周夢

蝶タルヤカナラス分チカタクアラン云ク是ヲ物化ト云荘周夢ニ胡蝶トナルサメテ周〳〵サトモ蝶ノ周タルヤ周ノ蝶タルヤ不知

蛙

異名 石蜂 丁子蟹 蟾蜍 形大ク夏事出 青蛙 色青ク蛙上ヘ大ナリ

蛙子 一名科斗 蛙の子ク

秋かけて物思ふころもあさくさそむる時と季ぞ

哥 夫木

こゑたてるあさくさよりとむらゐの蛙ぞ志きるなりける

家房

哥 千五百番

まこものふるのゐ田と来てふれハ鳴のふしごとに蛙なくなり

家長

哥 新六帖

まこの門ハ苔のさひしき岩うけの岩のうへにかれ蛙なくなり

信實

哥 家集

兼盛

沢あり蛙の多い老よりろ
おそくやうたんまれ小山田

詞 すだく。法多。川。池。沢田。小田の蛙。あれまく。苗代。夕月夜。山吹の花の咲。わまきこえ。蛙も蓑のかれらむ。岩乃。うれまかつまにたまく。雨にこひーき。こころ。かうろれとこ。あとたになく。あせつ〜ん 変

俳 我あと蛙ならん西れり田 蓮二 蛙も雨になられて蛙うる 草也 蛙ならこ蛙ろ 江の里れ数 其角

狂 蔵にのしたを今そまひてやよ蛙 よしひいみくこう畑ときれば負柳

蛙 蟹

女子雑説

龍玉海ノ辺ニ蛙ニアフテ問テ云汝カ喜怒何如曰我喜ブ時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツテシコレニ次クニ脹腹ヲモツテシ脹リスギルニイタリテノチヤムナリ

毛弥

日本紀應神紀冬十月国栖人国津物ヲ献ズ此クズ人常ニ山ノ菓ヲ食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味トス名ケテ毛弥ト云○本朝食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ熟キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカラシ醋ヲ和テコレヲ食フ唐土曼群蛙ノ鳴ヲキヽテイハク此殊人ノ耳ヲ駭スクス珪曰我鼓吹ヲ听クニホトンドコヽニ及バズトイヒケレハ曼慙テ退ク

曼ハ鼓吹ヲコノム人〜○宋書ニ蝦蟆ノ膾見〜タリ○漢東方朔カ傳ニモカハズヲ食フコト見〜タリ○淮南子ニ五月十五日蝦蟆羹ヲ作ルトアリ○花史左編ニ百越ノ人好テ蝦蟆ヲクラフ 延會アレハコレヲ嚢シヤウ義味トスルナリ

井堤蛙

袋草子曰帯カ幕信始テ能因二逢シ時能因今日見参ノ引出物ニ見スベキ物アリトテ懐中ヨリ錦ノ小袋取出是我重宝長柄橋造ル時ノ鉋屑ト云テケレバ節信大ヒニヨロコビ又懐中ヨリ紙ニツヽメルモノヲトリ出シテ見セケル能因トリテ見ルニカレタル蛙ナリトテ共ニ感歎シ又フトコロニシテ帰リケルヱ

妙術

止蛙鳴

蓼の末紀伊国さろ松の葉ふとを焼はしてさへ青魚ヒカ鮫のまへカトノコ

鮠子取

東医宝鑑に青魚ヒカ鮫のまへカトノコ

トコ

蒸鰈

若狭越前ノ海ニ多シ魚大サ五六寸ニ成レバ蒸テ食ス干テ法ノ如ク出ル必ク多ク有テ食ス

俳むかしやあるじ衣其角

狂かなとこうへ見とろろさの塩ぬいいよいくれぬ味てをあれ道鐘

田螺

田嬴一名既青の胡麻とからしと忘むろろ

俳ろるしゆに交ろやゆ田ゑ蓮二

妙薬

あぶら粉と白粉つぶして唾付て

疣瘤を治る法

田はこの白ゑ粉と

よくこしろ松のみどりとはなるとを粉としてとこしらく

松脂と田ゑしのむかかど加

うす粉そねうあ粉あたゝ付べ

蜷

異名

河貝子。蜆蠃。螺蜆

蜷ハ俗字ニ御簾に付ル

總角の結ひたるかたちのごとし

故に肥おん流後の俗ハアゲマキ

俳なよへつの茅ケ崎ハ

妙薬

産後後門脱ニ痛を治す

慮のまやゆ紀と麦粉を粉

はして付べしゆんちんの痛を治す

ときて後焼のまゝ酒と二三度掛
まゝ酒のまゝを付てし

寄居虫 形蟹に似て殻の売よ
ヤドカリガニ やどかり貝 云
一名寄生蟹こゝ云朝鮮からん
だのあよ一二尺のものあり

(俳) 寄蟹の殻をさゝことはめさ夏堤亭
三方丈の風景のさゝる花菖蒲蟲 乙由

(狂) 弓ふこと流の上ら浪世ゝ
宿をゝのかひゝあるゝ 信海

馬刀 貝の如くなる鼠ゝ子駄分
の形まあらぬまてゝさゝまゝと

(俳) そこにる力ゝ三月浮恍波 蓮二
浦にあて天ゝる力の風も苔 千丈

(狂) いゝらゝとまゝそこいすゝもゝまらふべ
いゝゝ貝ゝ鮑ひまゝ 宇羅

ゝ孫子 三才考舎曰ゝ字不詳
黄鯛魚に似ゝそゝ

(俳) 孫ゝをゝてもろゝを約の約や方策
況良の言ちゝゝとゝろゝ煩かゝ扇

必用 此ゝ八三月一ケ月必用
ゝみゝ長ゝの法ゝをゝゝる

破軍向方

夜九ツ 巳の方	夜八ツ 午の方	夜七ツ 未の方	
翌九ツ 申の方	翌八ツ 酉の方	翌七ツ 戌の方	
翌九ツ 亥の方	翌八ツ 子の方	翌七ツ 丑の方	
暮六ツ 寅の方	暮五ツ 卯の方	暮四ツ 辰の方	

日刻 年ゝ月ゝ日ゝ時ゝの日刻の別あ
の日和の別を考べゝ法度

生産作事 西南ゝ人
てもゝくべし

壬の日をのぞくべゝ 甲庚
丙壬のゝきをもちゝ

楽事 見月と芳菲の時と
ひて民俗酒をたゞ
さゝて肥辺武拵
拾ひまゝ紙を
ざゝき一条ざゝら
ろびゝう拵ハ二月末ゝハ大板

えて若糸桃心るどてはるる
なり酔に乗て暮と惜るあ
ぶるはたのしてゆめだに
れしまほい日月人人を
ともよ偏なき樂事
中秋のときとなりうるを

天氣占候

三月和の日 三あれい至よ

しし素問曰丑に風ならざれば
人寒熱ゑしこいろり甲子に
雷あるべ大熟ゑう日雨みべ
罕なり月ひろりるれば災ゑあ
を切糸に人もを蚕ば秋米價ゑる
西に人を蚕ば蠶茶ともに高し災
あり月雨ゑ死を早ゑり月
餓死のを蚕ば茶安し民に災あり

二月用ゑ品

左ゑ
ゑるす

養猫法 ゑ生ゑと蚕ゑ描と初
飼ひ始ゑ食ゑ

花壇土 四月花壇ゑ土ゑ
製筆 四月ゑ三月十日まで に収め
制ゑ ゑ筆ゑ佳とす毛ハ秋ハ
九月に取ゑ ゑ毛白毛と
はゑ軸竹もはく其ゑ切ゑと
利ゑ竹を煎ゑ利ゑ
無く酒に硫黄ゑ入て筆千の
毛ゑ紙を舒ゑ
果多生 梨石榴ま等の樹ゑ
ゑても其ゑ根相愛のゑ
のをゑゑにけ根の下へたい
むゑゑゑゑ

雑品

○葡萄の根と樹幹を
あげおくべし ○墻垣に樂く
べし ○百菜の樹の下と春く
ゑしゑのゑ草
木の茂らざるにも社日ゑゑ
の酒と根ゑゑくべし 捨ゑ
ゑゑも生ゑゑゑゑゑゑゑゑ
初午ゑゑの酒をかけてもは

養生

二月天気晴明の日と
雨雪三星経脉灸
をくべし　陽気をたすけ邪気を
ふせぐ　灸にいろり御手
鬱金のやまひまーと書養
叢書にえいらう但灸穴ハ其
人の病症によりてあるべし
右の二穴にかぎらずべうす

服神明散

佩べし　蒼朮　栝樓　頭　烏
散と　紅絹の袋に入れ
脊に帯べし　一家一病ほとり
時疫あらばけらるる事を
服たてのみうして服とられば
あせ出てやまひ速に愈
ぶをまいらる法

二月丁亥の日香
花と梅花と侯于ほして搗し
戊子の日服ての丸にして一七
粒をべし　日に三度用べし

二月飲食 并 料理献立

禁忌

兎肉　二月兎ハ孕を中ぶる
鶏卵　二月鶏ハ
ぶをやぶる
黄花菜　二月ハ痼疾を発す
陳俎　二月俎ハ疾を発す
日
陰流水　二月春ハ瘧疾を発す
梨子
大辛物　二月ハ目ぶ
酸物　二月食ハ酸ハ
生冷ハ痢を発す

料理

汁　たいぎ　よりあ　申
ぬうど　ようある
ぬいも　めうど
ちさ　ちやうし
やぶ　あ　ひ
恰　ちさ

鱠　こい・かいわり　あかゞひ　いりざけ
さより・うど・くり・せうが

指身　白うを・はくし　茅しそ・みかん
生かつを　うど　わさびみそ

坪　塩つくも　つくつくし
岩茸　ごうど

二汁　塩かも　松露

小串　かぶ　推茸

海老　芽たて　いり塩

煮物　田でる　ごま　こんにやく

焼物　蒲鉾鯛　わらび

和物　白うを　木くらげ　きんかん

吸物　あさり　きのめ

まて貝　うど　ごりうきう

いか　牛房　さゝがき

和物　たこ　岩たけ　きさんせう

むきみ　すりおく　まぐろ

精進

汁　ふき　つく薯

根いも　ゆりね

松茸　さくら

鱠　あげふ　きくらげ　きんかん

坪　焼ふり　きくらげ　うどの芽

長いも　椎茸　ぢうば

香味　ゆげふ　そうす　すゐぜん

ごぼう　まい茸　いりざけ

糸こんにやく　むきみ　ゆずいり

二汁　麩すいもの　むこうど

藻ずく　からし

煮物　とうふ、推茸　うど

生ゆバ　岩茸　くわゐ

吸物　ゆず　なめ

和物　かんぴやう　くわゐ　きのめあへ

摘み菜　ぢく　きのめあへ

時物

魚　かれい。鮒。こち。さわら　いか。鮎。白うを。藻魚

鳥　かも　源氏鶏　雲雀　鶯菜の壱小きゝし

青物　つくし。ねぎ。若牛房　蕗のたう　花さんせう

うど。芽じそ。蓼たで。

担いも。竹のこ。きうりもみ。

白うりほし。うてぎ。くこ

ふきのとう。えもといも

梅花久貯法　極上一の梅干一升に塩八合右の

頭を取て入まぜはなの底ゟ流むなり梅の花ハ紅白八重ともに

咲ひらきあるひハ散ざるを枝ながら切て流ます塩に

と掛硯い死の上にて上るやうに
多くへ入る匠掛間のへうめ換に旅蓋
とて人の通はざる所に虫毒の時に遣
用もるかあれどもとくだて薬
多くへられハ死所にて毒の時に遣
うその匠鶏のけんこどにもはし

蕈菜海松貯法

さつまを通ー巻の
あら毒漬毒匠
あ一升塩一合あら毒漬毒匠
色かつらぎーそうくたのつし

海藻貯法

そくーく一升水
と去塩三合入て
紙封して毒匠ゑくーく換せに
用るハ時ハ去へぐーく水につけ塩を去

木芽作法

きのめさつくろつく
毎月晦日に藏
の目を石墓よ
すれおけば芽を出をこれを
そりはさりこすあ紙あらとう
ち日よりをぐーやく
芽をいくとたうの三月終